D 教室 撮影実習－商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル オークション

「オークション出品商品」の撮影

■撮影データ

デジタルカメラ
Canon PowerShot SX230 HS
露出補正：＋１
ホワイトバランス：オート
シャッター速度：自動
絞り値：自動
ISO：自動
画像加工：明るさとシャープの微調整
撮影用照明：なし
撮影時間：約 15 分

デジタルカメラは、実売価格１万５千円程度の普通のコンパクトタイプのデジカメ。
このあとの写真も、すべて、同じデジカメを使って撮影しています。

デジカメの操作は、露出補正だけをきちんと調整して、あとはカメラ任せのオート状態。

照明は、天井の照明も使わず、日中の室内の明るさだけで撮影。

撮影時間のほとんどは、スカートの裾を広げるための細工に掛かった時間です。

撮影のポイント

オークション出品商品ということですが、ここでは、「個人での出品」を想定した撮り方のコツやポイントを解説します。

ネットショップと大きく違うところは、新品ではなく、中古品というケースが多いという点だと思います。すでに使われた商品ですから、何らかの傷や汚れがあったりするでしょう。それを、ユーザーにきちんと伝えなくてはなりません。

また、掲載できる商品写真の数にも限りがあるため、どこをどのように見せるかをしっかりと考えた上で、撮影することが必要です。

そのあたりを踏まえて、アマチュアにもできる、オークション出品商品の撮り方について考えてみましょう。

D 教室　撮影実習－商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル
オークション

「オークション出品商品」の撮影

やってはいけない３つのこと

オークション出品者のほとんどの方は、撮影用の照明など持っていなくて、自宅の限られた条件の中で撮影すると思います。
その中でも、「これをやってはダメ」ということが３つありますので、まずは、その３つを知って下さい。

１. デジカメのフラッシュを使ってはダメ

ときどき見られる、イマイチなオークション写真に、こんな写真があります。

写真の中の一か所に、白い明るい部分があります。これは、デジカメのフラッシュの光が反射して、白く光ってしまっているのです。
フラッシュを使うと、上の写真のように、一点だけが光ってしまう、強い影ができる、コントラスト（陰影）が極端になる、といった、見栄えの良い写真とは言えない結果になってしまいます。

強い影ができてしまう

コントラストが強過ぎる

ですので、商品写真を撮影するときには、**"デジカメのフラッシュは使わない"** というのが、基本中の基本です。

多くの方は、室内で撮影する場合、外のように明るくないので、フラッシュを使わないと明るい写真が撮れないと思っているようですが、それは間違いです。
フラッシュを使わなくても十分に明るい写真が撮れます。そもそも、撮影場所の明るさと、写真の明るさとは、ほとんど関係がないのです。

D 教室 撮影実習－商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル
オークション「オークション出品商品」の撮影

やってはいけない３つのこと

では、どうやったら、フラッシュを使わなくても明るい写真が撮れるのか。
「Ａ教室・デジタルカメラの必須操作」でも説明していますが、明るい写真を撮るために欠くことができない、デジタルカメラの操作方法を知りましょう。

とても簡単な操作ですので、入札を増やすために、落札価格が少しでも高くなるように、面倒くさいと思わず、ぜひ習得して下さい。

１）フラッシュを使っても、撮影場所が明るくても、だからと言って明るく写るわけじゃない

まず下の写真を見比べて下さい。

a

b

c

どれも、デジカメ任せの「オート」で撮影していますが、

- a　フラッシュを使って撮影した写真
- b　フラッシュを「発光禁止」にして撮影した写真
- c　窓際の明るい場所で撮影した写真

となっています。

写真全体の明るさを比べてみて下さい。撮影対象である被写体は、白を基調としたものですが、どれもが、明るさが不十分と感じます。
フラッシュを使ったからといって、あるいは、明るい場所だからといって、明るく撮れるのではない、ということがわかります。これは、すべてのカメラに共通して言えることです。

では、いったいどうすれば、もっと明るい写真にできるのか。
そのためには、**「露出補正（ろしゅつほせい）」**という機能を操作する以外にないのです。

D 教室 **撮影実習ー商品別撮影実践**

■撮影商品ジャンル
オークション

「オークション出品商品」の撮影

やってはいけない３つのこと

２）「露出補正（ろしゅつほせい）」の操作方法

「露出補正」を操作・調整することが、明るい写真を撮るために必須となるので、ほとんどすべてのカメラに備わっている機能です。

操作手順１．露出補正の調整画面を呼び出す

デジカメ本体ににたくさんついている操作ボタンの中から**「露出補正」**または**「ＥＶ（露出補正を表す英文字記号）」**もしくは、 このマークがあるボタンを押して下さい。

お使いのデジタルカメラの操作ボタンの中に、そのようなボタンがない場合は、メニュー画面を呼び出し、**「露出補正」**または**「ＥＶ（露出補正を表す英文字記号）」**、もしくは、 このマークを選択して下さい。

※機種によっては、オート設定のままでは、露出補正ができないカメラもあります。その場合は、オート設定ではなく、「Ｐ（プログラム）」というモードに設定して下さい。
「Ｐ（プログラム）」というモードがない場合は「マニュアル」に設定します。もしどうしても露出補正の調整画面が見つけられない場合は、取扱説明書で確認し、必ず操作できるようにして下さい。露出補正は、写真撮影にとって、極めて重要度の高い機能です。

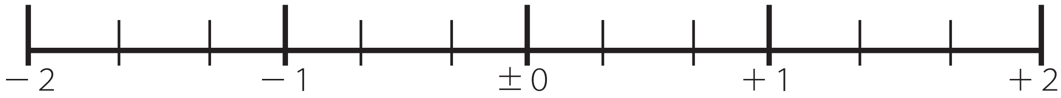
操作手順２．露出補正を操作・調整する

露出補正の調整画面を呼び出すと、目盛りや数字が表示されます。何もしない状態では、目盛りまたは数字は「±０」となっているはずです。（目盛りと数字両方が表示される機種と数字だけが表示される機種がありますが、どちらも調整方法は同様です。）
この数字は、「＋（プラス）」側または「ー（マイナス側）」のどちらかに、数値を増やしていくことができ、調整方法の基本としては、次のようになります。

「＋（プラス）」側に数値を増やすほどに、明るさを増した写真が撮れる

「ー（マイナス側）」に数値を増やしていくと、写真はどんどん暗くなる

露出補正の数　値



このように、撮影場所の明るさとは関係なく、露出補正を調整することで、暗くてほとんど見えない状態から、明る過ぎると言えるくらいの範囲内で、撮影者の意図するとおり、ほぼ自由に明るさを調整して撮影することができるのです。

D 教室 撮影実習－商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル オークション「オークション出品商品」の撮影

○ やってはいけない３つのこと

では、前に例として使った被写体を、露出補正を操作して、もう一度撮影してみます。

しっかりと明るく撮れました。

フラッシュを使って撮影した写真と比べてみると、フラッシュを使わず（発光禁止にする）、露出補正を操作して撮影した写真の方が、グッと印象が良くなることがわかります。

フラッシュを使っても明るい写真が撮れるわけではなく、かえって見づらい写真になってしまうだけです。
露出補正を覚えて、しっかりと明るい写真を撮れるようになることは、より良いオークション出品商品の写真を撮影するために、避けては通れないことなのです。

※「露出補正」についてもっと詳しい解説は「Ａ教室・デジタルカメラの必須操作・露出補正」をご覧下さい。

D 教室 撮影実習ー商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル
オークション「オークション出品商品」の撮影

やってはいけない３つのこと

2. 床や畳の上で、そのまま撮ってはダメ

これも、例を見てみましょう。

いくら個人出品とは言え、中古品とは言え、商品価値を感じづらいと思いませんか？

特に畳の上というのは、"みすぼらしい" 感じさえしてしまいます。

ネットオークションのみならず、商品写真では、「背景」が重要な役割を持っていることを、ぜひ、知っておいて下さい。

1）背景を整えるだけで、写真は変わる

床や畳ではなく、背景（商品の下）に白い紙を置いて、撮り直してみた写真です。

白い紙の上で撮る、たったそれだけのことで、印象が明らかに変わります。

出品者自身は、出品する商品の写り方ばかりを気にしがちですが、ユーザーの目には、商品と同時に背景も見えています。背景も含めて、ひとつの写真として見ているのです。

床や畳が見えてしまうことで、生活感のようなものを感じてしまい、「出品商品を使っていた人」を想像してしまいます。

誰かが使っていた中古品であることが分かってはいても、それがストレートに感じ取れてしまうと、気持ちがちょっと "引いて" しまうのではないでしょうか。

できるだけ出品商品だけに注目してもらうためには、背景に余計なものが写らないように、白い紙を背景として撮影することが基本です。

写真に写る範囲を完全にカバーできる大きさであれば、画用紙でもカレンダーの裏でも、何でもいいので、白い紙を背景とすることを、オークション出品商品の撮影の基本としましょう。

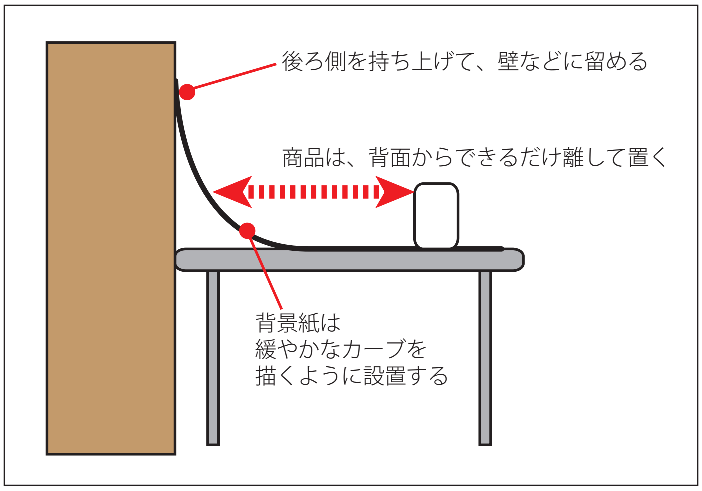
※大人の洋服を撮る場合、背景として画面全体をカバーできるような大きな白い紙を持っていることはほとんどないでしょうから、別の方法を考える必要があります。これについては、この先で、撮影方法の提案をさせてもらいます。

D 教室 撮影実習ー商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル
オークション「オークション出品商品」の撮影

やってはいけない３つのこと

立体的な商品を撮影する場合



背景の後ろ側を、壁にピンで留めたり、椅子の背にテープで張るなどして持ち上げるようにします。

商品を置く位置は、背面からできるだけ離して置き、また、背景が折れてしまわないように、気をつけましょう。全体が平面的で、どことなく"ダサい"印象になってしまいます。

商品を背面近くに置いて、
背景が折れている

商品を背面から離して置いて、
背景にカーブを持たせている

その他の背景の注意点

・画面全体をカバーする大きさが必要

「少しくらいまあいいか」と、白い背景が画面全体をカバーできていないと、それだけで、写真の印象は変わります。

必ず、画面全体をカバーできる大きさの紙を使って下さい。

D 教室 撮影実習ー商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル
オークション

「オークション出品商品」の撮影

やってはいけない３つのこと

その他の背景の注意点

・シーツなどの布は避ける

「白ければいいんじゃないか」と、シーツのような布を背景としているオークション写真もよく見かけます。

問題は、シワです。これがとても気になるのです。「やっつけ仕事」で撮った写真、といった印象になり、商品価値を高めることができません。薄い紙を使った場合も同様のシワや折り目が着いてしまいますので、注意が必要です。

背景は、カレンダーや画用紙くらいの厚みを持った白い紙を使うように心掛けましょう。

※何度もオークションに出品する可能性がある場合で、家の中に手頃な紙がなければ、文具店などで大きな白い紙を購入してでも、準備しておくことをおすすめします。それほどまでに、背景は写真の印象に影響するのです。

※背景についてもっと詳しい解説は「Ｂ教室・撮影前に用意しておきたい道具」をご覧下さい。

３. 電球色で撮ってはダメ

出品商品を、できるだけ実物に近い色で撮影したいのは言うまでもありません。

そのためには、**白熱電球や電球色の蛍光灯照明の部屋で撮影するのは避ける**ようにします。

このように、照明のオレンジ色の光が影響した写真になってしまいます。

D 教室 撮影実習ー商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル
オークション

「オークション出品商品」の撮影

やってはいけない３つのこと

　デジカメの操作に慣れていて、「ホワイトバランス」という色の調整機能を使いこなせるのなら、問題を解決できますが、そうでない場合は、オレンジ色の光を発する、白熱電球や、電球色の蛍光灯照明の部屋での撮影は避けるべきです。

　日中に、室内照明を点灯していない部屋や、普通の蛍光灯照明の部屋であれば、デジカメは、実物に近い色で写真が撮れるようになっています。（外の天気が晴れているか雨か、あるいは、撮影する部屋の天井照明があまり明るくない、など、室内の明るさは、写真の仕上がりの明るさには影響しません。写真の明るさは、「露出補正」で調整します。）

　色の再現については、ユーザーのディスプレイも関係してくるので、完全に思い通りにすることは不可能ですが、より良い結果を得るためには、照明を点灯していない日中の室内か、普通の蛍光灯（天井照明）が良いと覚えておいて下さい。

　さて、ここまで説明してきた、「やってはいけない３つのこと」、

1．デジカメのフラッシュを使ってはダメ
2．床や畳の上で、そのまま撮ってはダメ
3．電球色で撮ってはダメ

　この3項目に気をつけて撮影するだけで、次のような写真が撮れます。

「可もなく不可もなく」と言ってしまえばそれまでですが、だからこそ、出品商品を、きちんと見てもらえます。
それが、オークション出品商品の撮影方法の基本と言えるのではないでしょうか。

D 教室 撮影実習－商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル
オークション「オークション出品商品」の撮影

正確に伝えるために

個人オークションであっても、商品を販売するための写真ですから、その商品の情報を、できる限り正確に伝える必要があります。

しかも、例えば「ヤフオク」ならば、３カット（３枚）と、画像の使用数も決められています。その中で、必要な情報を伝えなくてはならないのですから、１カットたりともおろそかにはできません。

では、写真で伝えるべき情報を、正しく写し撮るためには、どんなことに注意したらいいのか、特に大切なポイント３つを解説します。

1. 全体像を正しく写す

出品商品の全体を写した写真は当然必要です。
そして、商品全体を撮影するときに、最も注意すべき点は、撮影対象となる被写体と、デジカメとの距離です。

カメラの構造上、被写体から、できるだけ離れて撮影するほどに、形が正しく写ります。

ただ、離れると被写体は小さく写ることになるので、ズームを望遠側にして、適度な大きさに写るようにする必要があります。
実際に撮影してみた写真で比較してみましょう。

商品から約50cm離れて撮影

商品から約３m離れて撮影

同じ箱を撮影しても、近い距離から撮影した写真と、離れた位置から、デジカメのズームを望遠側で大きく写るようにして撮影した写真とでは、形の正しさに大きな違いが見て取れます。
出品商品の形を正しく写すためには、できるだけ離れて撮ることが重要だったのです。

普通の机の上に乗るくらいの商品であれば、最低でも１m以上、できれば、２～３mくらいは離れて撮りたいところです。
理論的には、離れるほどに形の写り方は正しくなりますが、撮影場所の条件もあるでしょうから、できる限り離れて撮る、というふうに覚えておいて下さい。
その位置で、画面の中で商品をどれくらの大きさに写すかは、デジカメのズームを操作して調整するようにします。手順としては、次のようになります。

1. 撮影する商品からできるだけ離れた位置にデジカメを設置する（あるいはデジカメを構える）
2. 商品が写る大きさは、ズームの操作で調整する

という順番です。

※衣類の場合、置き方も関係してきますが、それはこの先で説明します。

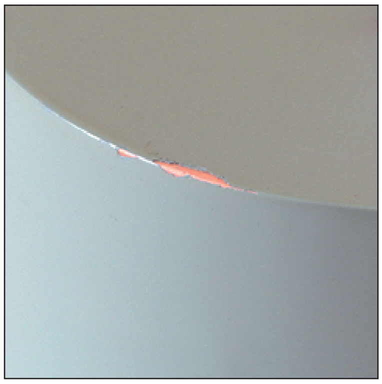
D 教室 撮影実習－商品別撮影実践

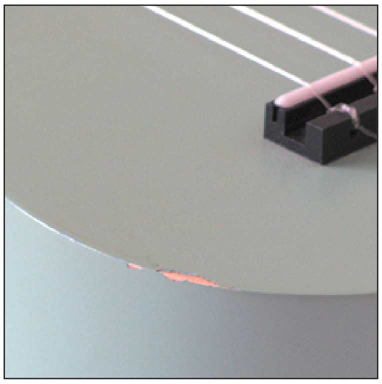
■撮影商品ジャンル
オークション「オークション出品商品」の撮影

正確に伝えるために

2. 傷や汚れをきちんと写す

中古品の場合、落札後のトラブルを防ぐためにも、きちんと伝えなくてはならない、大切な情報です。
この場合は、できるだけアップで撮影することを心掛けることが必要です。
傷や汚れが、商品のどの部分にあるのかが分かるような写真であれば、より理想的です。

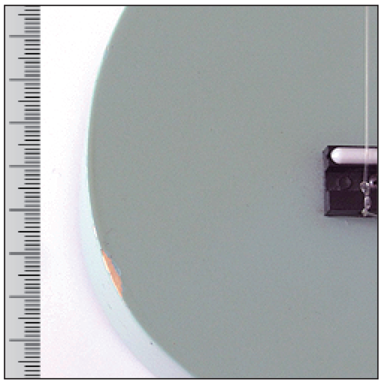




はっきりとした傷や汚れがある場合、その大きさも伝えておかなくてはなりません。そんなときには、わかりやすく、定規を脇に添えて撮るのもいいかもしれません。

ネットショップの商品写真で、商品の大きさや各部位の大きさを伝えるために、定規を一緒に撮ったりするのは、商品のイメージダウンに繋がることもありますが、オークションで中古品の傷などを伝えるためには、効果的だと思います。「出品者は正しい情報を伝えようとしている」と、好印象を与えることになるかもしれません。

それでも「定規はダサいからイヤだ」という場合は、こんな方法もあります。



画像加工ソフトを使う必要がありますが、Webで、定規のフリー素材を提供してくれているサイトを見つけて、気に入ったデザインの定規のイラストをダウンロードします。

それを、画像加工ソフトを使って、相応の大きさに調整して商品の写真に合成すると、実物の定規を添えて撮るよりも、見た目の印象が良くなるかもしれません。

※ここで使っている定規のイラストは、
「素材Library.com」http://www.sozai-library.com/
が提供している素材です。

傷や汚れがうまく写らない場合は、デジカメの位置や、商品の置き方を変えてみることが必要です。もし、卓上用スタンドライト（光源は普通の蛍光灯）があれば、それで照らしてみると、傷などがはっきりと浮かび上がって見えることもあるので、試してみるといいかもしれません。

いずれにせよ、中古品の場合、大切な情報なので、しっかりと伝えるようにしましょう。

※もちろん、写真だけに頼らず、テキスト（文章）で、はっきり記載することも必要です。

D 教室 撮影実習－商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル オークション

「オークション出品商品」の撮影

正確に伝えるために

3. 何を見せる写真なのかを明確にする

ブランド品の場合は、タグやロゴマーク、あるいは付属品など、本物である証明となる部分を正しく写して見てもらうことが欠かせません。

とは言っても、使える写真の数が限られています。その中で、どこを見せるべきか、選択基準は、興味を持ってくれそうなユーザーは、その商品の何を見たいと思っているのか、を考えることです。

そして、写すべき部分、あるいは、見せるべきものが決まったなら、それ以外は考えず、それだけがきちんと写るように考えて撮影することがポイントです。

例えば、洋服の首元のタグを見てもらうことが重要と考えたなら、「ついでに襟元まで写るような構図で」などと欲張らず、タグだけをアップで写す、といった思い切りも大切です。それでこそ、「伝わる写真」となって、ユーザーに納得、安心、してもらえることに繋がるのだと思います。

見せるべき部分の周辺部まで
一緒に写そうとすると、
肝心の見せるべき部分が、
目立たなく、
見えづらくなってしまう

他のことは考えず、
見せるべき部分だけを
きちんと写すことで、
しっかりと伝えることができる

D 教室　撮影実習ー商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル オークション「オークション出品商品」の撮影

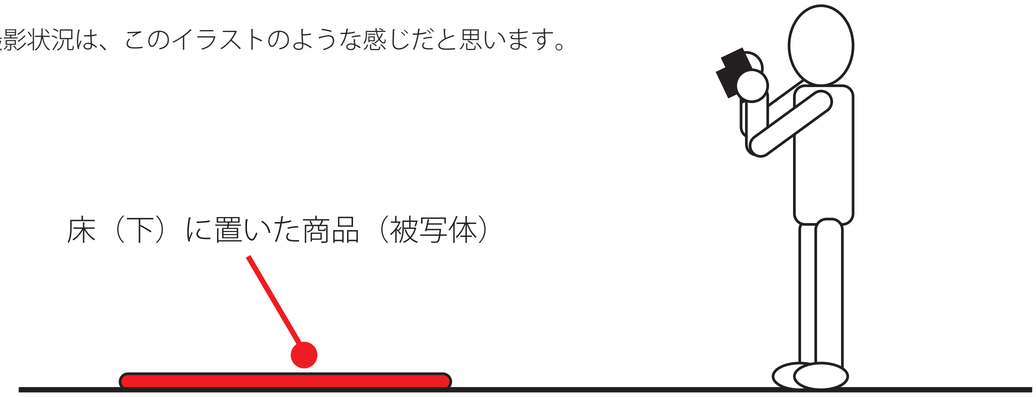
衣類を撮る場合

個人オークション出品商品の中で、かなりの割合を占めるのが衣類だと思います。
そこで、衣類を撮影するときに、「こうしたらもっと良くなる」というポイントを３つ提案します。

1. セッティングの工夫･･･その１

衣類の出品写真を見てみると、その多くが下の写真のように撮られています。

撮影状況は、このイラストのような感じだと思います。



こうして撮ると、服の手前（裾の方）は大きく、奥（襟元の方）が小さく写り、遠近感が強調されてしまいます。
服を撮る場合、理想的には、商品に対してデジカメを正対させること、つまり真正面から撮るということです。となると、もし、下に置いて撮るのなら、次のイラストのようにしなくてはならない、ということになってしまいます。

不可能ではないかもしれませんが、かなり難しい状況だと思います。
そこで、服の置き方に工夫をして、正対に近い状況を作ってみましょう。

D 教室　撮影実習－商品別撮影実践

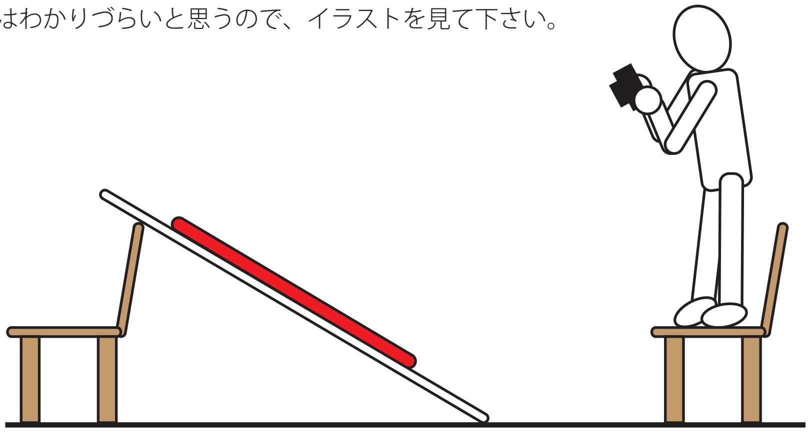
■撮影商品ジャンル
オークション「オークション出品商品」の撮影

衣類を撮る場合

服（商品）を斜めに置けるようにする

「斜めに置く」というのは、どういうことかと言うと、大きな板を用意して、それを、椅子などを支えとして斜めに設置し、その上に商品を置くのです。

言葉ではわかりづらいと思うので、イラストを見て下さい。



商品である服を置くための台となる板は、和室の "ふすま" などを利用すればよいのです。

和室のふすまをはずして、椅子を支えとして設置、そして背景となる白い紙を置き、その上に商品である服を置いたら、準備完了です。（ふすまが白い無地であれば、白い紙も必要ありません。）

服を、傾斜を着けた台の上に置くことで、完全に真正面とはいかなくても、真正面に近づけることができます。（服が滑り落ちない範囲で、できるだけ角度を付けるほどに、真正面に近づけやすくなります。）

ちょっと面倒かもしれませんが、写真の印象を大きく変えることがきるので、衣類を出品するときには、ぜひ試してもらいたい方法です。

D 教室 撮影実習ー商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル オークション

「オークション出品商品」の撮影

衣類を撮る場合

2. セッティングの工夫・・・その２

大人の服を撮影するときに、画面全体をカバーできる大きさの白い紙なんて、持っている方は、ほとんどいないと思います。

でも、背景は重要です。

そこで、下に置かずに、ハンガーに掛けて、壁を背景にしてみるのです。

こうすれば、白い背景を使って撮影したのと同じような結果になります。また、カメラ位置も服の真正面にできるので、形も正しく写すことができます。

木目のドアなどを背景紙にしてみるのもいいかもしれません。

ハンガーの一部が写ってしまいますが、下に置いて撮るよりも、自然なイメージで見てもらえそうだと思いませんか？

注意したいのは、背景が目立ってしまわないことです。

主役であるはずの出品商品が目立たなくなってしまうような、派手な模様があったり、部屋の角の線が写ってしまったり、あるいはドアの取っ手が写ってしまったり、など、とにかく**余計なものが写らないところを探して、そこを背景にする**ことです。

D 教室 撮影実習ー商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル
オークション 「オークション出品商品」の撮影

衣類を撮る場合

スカートの裾の広がりなどを見せたいときには、目立たないように白い糸や、もしあれば、テグス（釣り糸のような透明な糸）を、広げて見せたい部分に留めておきます。

そして、デジカメをセルフタイマーにしてシャッターを押し、商品のところに行って、糸あるいはテグスを自分で引っ張って撮ればＯＫです。

※あまり乱暴に引っ張ると、商品が大きく揺れて、ブレて写ってしまうことがあるので、
商品が大きく揺れたりしないように注意しましょう。

3. 画像加工ができるなら

特にレディースファッションの場合、商品のいろいろなところを見たいというのが、ユーザーの希望だと思います。
しかし、使える写真の数には限りがあります。そこで、画像加工ソフトを持っているなら、積極的に活用しましょう。

複数のカットを合成してひとつの画像にすることで、より多くの情報を伝えることができるのですから、ちょっと手間が掛っても、ぜひ実行すべきだと思います。

どんな写真を、どんなふうに組み合わせたらいいかは、同じような商品を販売している、ネットショップを参考にしてみるのもいいかもしれませんね。

D 教室 撮影実習－商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル オークション 「オークション出品商品」の撮影

衣類を撮る場合

補足：どうしても床に置いて撮る場合のちょっとしたコツ

背景にできるような適当な壁がなかったり、見せ方のこだわりなどから、どうしても床に置いて撮影しなくてはならない場合には、ちょっとしたコツがあります。

下のふたつの写真を比べてみて下さい。違いがわかるでしょうか。

a

b

背景となっている床板の方向に違いがあります。
aは、床板の並びが、画面に対して真っ直ぐになるように撮ったもの。
bは、床板が斜めに写るようにして撮ったものです。
ほんのちょっとした違いですが、画面の中に直線が入る場合、斜めに写るようにするのがコツなのです。

直線が、写真の外枠に対して、すべてきちんと平行に写るならよいのですが、実際には、下の写真のように写ってしまいます。

画面の上の方（奥）にいくほどに、床板の幅が狭く写ってしまいます。
きちんと等間隔で、平行に揃っていない直線が、なんとなく "シロートっぽさ" を感じてしまう要因のひとつなのです。

背景となるものに直線がある場合、できるだけ斜めに写るような構図にした写真の方が、"シロートっぽさ" を感じづらく、印象度のアップが望めます。

D 教室 **撮影実習－商品別撮影実践**

■撮影商品ジャンル
オークション

「オークション出品商品」の撮影

ＣＤ・ＤＶＤ・カードなど

平面的なものの印象度を高める写し方（見せ方）は、置き方を考えることです。

どんな置き方をすれば目立つか、あるいはより魅力的に見えるかを考えるとき、大いに参考になるのが、学習教材を販売しているWebサイトです。
学習教材は、「参考書●●冊/ＣＤ・ＤＶＤ●●枚のセット」といった内容が多いので、その置き方（見せ方）を知ることがとても約に立つというわけです。

それほど大きくもなく、重たくもないので、後ろに支えになるものを置くだけで、簡単に立てることができます。

また、正面から撮影することが多いと思いますが、パッケージなどの表面にカメラや自分が写ってしまって気になる場合は、商品からできるだけ離れて撮影すれば、カメラや自分が、小さく写るので、かなり改善できます。（離れて写すので、ズームは望遠側にして、商品が大きく写るようにしましょう。）
さらにちょっとしたことですが、白などの明るい色の服を着ていると、余計に目立ってしまうので、黒などの濃い色の服を着て撮影するのもコツと言えます。

多くの場合、ＣＤ・ＤＶＤ・カードなどは、商品自体は知られているという前提ですから、説明的な写真というより、まずはパッと見た時に目にとめてもらえるように、置き方に工夫した写真を考えることがポイントかもしれません。

D 教室 撮影実習ー商品別撮影実践

■撮影商品ジャンル
オークション「オークション出品商品」の撮影

用意しておきたい道具

「オークション出品商品」の撮影、最後は、用意しておきたい道具についてです。

1. 背景紙

これは必須と言いたいです。
文具店などで購入できる白い紙（あまり薄くない）でいいので、ぜひ用意しておきましょう。
継続的にオークションに出品するのなら、撮影用に作られた背景紙の購入をおすすめします。よりバリエーションに富んだ、魅力的な写真にすることができるでしょう。

グラデーションの着いた、撮影用背景紙を使って撮影した写真→

2. カメラ用三脚

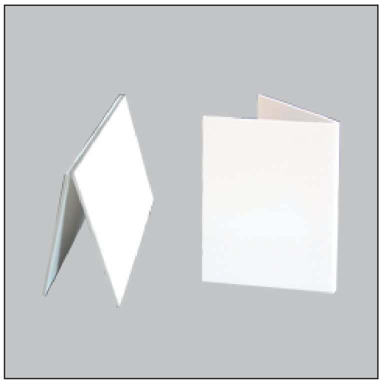
できるだけ三脚を使って撮影されることをおすすめします。
デジカメを手で持って撮影すると、どうしても手ブレがおきやすくなります。
また、セルフタイマーを利用するときなどは、当然必要になります。
何度も出品される方は、ぜひ用意しておきましょう。

※オークション出品商品を撮影するために必要な三脚の選び方は、
「B教室・カメラ用三脚」をご覧下さい。

3. レフ板

ここでは説明できませんでしたが、商品の写真を撮るときに用意しておく、大切な道具のひとつです。
詳しい説明ページがありますので、ぜひ目を通しておいて下さい。

※レフ板についての詳しい説明は、
「B教室・補講２・レフ板」をご覧下さい。



4. 撮影用照明

個人オークションとは言っても、本格的に出品を続けている方もいらっしゃると思います。
そんな場合は、商品自体をより美しく撮影することができる撮影用照明の導入を検討してみてもいいかもしれません。

撮影用照明「RIFA（リファー）-F40×40cm」→

D 教室 **撮影実習ー商品別撮影実践**

■撮影商品ジャンル
オークション

「オークション出品商品」の撮影

まとめ

継続して、商品の写真を撮り続けるわけではないので、高額な道具への投資はできませんが、身近にあるものを使ったり、ほんのひと手間、ひと工夫するだけでも、写真の出来栄えは違ってきます。

商品の全体像、傷や汚れはないか、あるとしたらどの程度か、そして何よりも、信頼できそうな出品者か、といった、ユーザーが知りたいであろう情報を、直観的に感じ取ってもらうことができる、商品写真はとても重要です。いい加減な写真では、信頼性も得づらくなるでしょう。

入札数のアップ、入札額のアップを考えるなら、ある程度の労力は惜しまずに、できることを丁寧に実行して、出品商品の写真を撮ることが必要だと思います。

特に、最初に説明した、「やってはいけない３つのこと」をしっかりと意識して、出品商品の写真撮影に臨んでみて下さい。

また、ここでは、コンパクトタイプのデジタルカメラを使った撮影について解説してきましたが、スマホなどの携帯端末のカメラで撮影する場合も、そのポイントは同じです。ぜひ試してみて下さい。

end